

～結び・拓き・育まれる＜馬事文化＞へ～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：岩手の馬事文化の継承と馬事文化に係る資源の利活用に係る調査研究
研究代表者：総合政策学部 教授 倉原宗孝
課題提案者：岩手県農林水産部競馬改革推進室 推進監 千葉義郎
研究メンバー：佐藤学（岩手県競馬改革推進室）高橋幸宏（同）村田忠之（岩手県畜産課）
加藤俊男（盛岡市観光課）
技術キーワード：馬事文化 馬 産業 芸能

▼研究の背景・目標

馬産地として知られる岩手県においては多様な馬事文化が存在する。チャグチャグ馬コをはじめ馬事文化には文化・芸能・観光・教育等の多様な要素が含まれ貴重な存在である。しかしながら近年、その主役である馬の減少が著しく、各地の馬事文化の継承が難しくなっている現状がある。こうした中で本研究は、関係者からのヒヤリングや事例、各種データの収集を通じて、貴重な馬事文化の継承に向けた現状・課題・方策を考えていく。

▼本県の馬産業、馬事文化の状況

本県では馬を利用する祭事が多いが、いずれも参加する馬の確保に腐心している。これらの祭事はもともと愛馬の無病息災を祈って行われたものであるが、馬の飼養頭数が減少すれば行事に参加する馬数が減るのは当然のことかも知れない。県内における農用馬の飼養戸数・頭数と耕耘機等の所有台数の推移をみると

(図)、昭和30年代に耕耘機等(図中、青線)が急速に普及した結果、それまで農耕に使われていた馬の頭数(同、赤線)が急速に減少していったことが伺える。馬から機械への転換という点(機能性・効率性)と共に、その背後にある産業スタイル・価値観(共生・文化)等にも目を向けた検討が必要かも知れない。飼養目的のうち使役目的が少なくなっていく中で、他の目的(子取り生産や肥育)へと転換していったものと推定される。

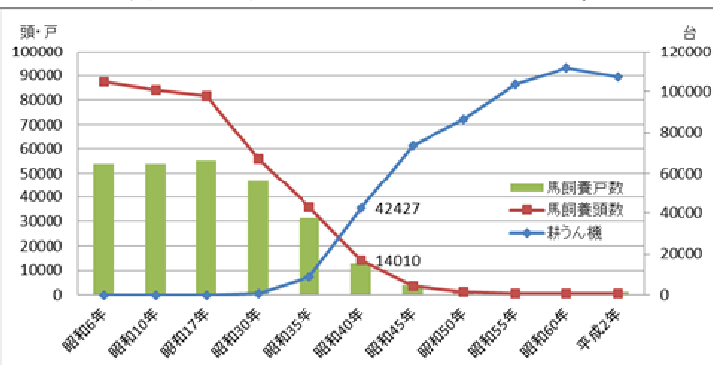


図 岩手県内における農用馬の飼養戸数・頭数と耕うん機等の所有台数の推移(昭和6年～平成2年)

馬事文化の性格の変化に目を向ける必要もある。例えば終戦直後は飼育頭数の減少に比例して装束馬も減少するが、昭和30年代には飼育頭数が減少を続けるにも関わらず装束馬の出頭数は増加を続ける。観光主体の祭り行事となったことが伺え、行政が主体となった保存会が出馬手当を拠出するなど奨励が背景にあったと思われる。調査過程で、馬は「経済動物」ではなくなったという声も耳にした。産業構造が大きく変化した現在、馬の肥育に向けた今日的意義や仕組みを創造していくことで馬数の確保と共に地域産業やライフスタイルへの提案・変革と連動させていくことも重要・有効ではないか

▼おわりに

馬に関する各分野・各主体の連携の必要性・有効性がある。従来、各分野が一同に会する機会がなかったようだ。また馬を題材にした福祉・教育・観光・商品など付加価値の可能性が大きい。そこには新しい世代・他地域との交流も必要・有効と思う。各情報収集に加えて具体的活動に向かいたい。

▼県内における新たな馬の活用の動き

左記状況の中で従来の馬産業・馬事文化の延長上あるいは別分野から新たな馬を活用した動きも登場してきている。馬ふん堆肥を活用したマッシュルーム栽培(企業組合八幡平地熱活用プロジェクト)、高原の貴重な財産である自然環境を次世代につなぐ保全・整備活動(安比高原ふるさと倶楽部)、馬搬の文化・技術の継承と共に木材のブランディングも狙う(遠野市・岩間氏)、古民家や地域の再生を馬の視点から描き出す(三陸駒舎)、など馬産業に付加価値を見出しているユニークで期待される活動が生まれてきている。これらの取り組み主体の多くが若い世代、特に30歳代というという点も注目されよう。



三陸駒舎／釜石市橋野地区の古民家を改修して活動が模索・展開される。各種活動と共に、地域住民、県内外各世代交流の場が育ちつつある。

▼馬を巡る県外の様々な素材

県内の状況・活動と同時に全国的な視野から馬・馬事文化を見つめることが、とりわけ情報・交通網が発達した今日において多様な効果の期待がある。近県で言えば、下北半島南部に存在した斗南藩による日本初の民間洋式牧場の開設があり本県の外山御料牧場にも影響を与えていると思われる。斗南藩を中心とした牧場経営が下北半島北部まで点在していることも興味深い。また同じく下北半島東端部、尻屋崎での寒立馬の放牧も興味深い。伝統馬の養育・普及という点は勿論、一般道にも重なる放牧地帯では馬と近くで触れることが出来、景観・観光・教育などの意義・効果もある。近江八幡市の賀茂神社は馬の神社として知られ、馬の聖地として全国の馬関係者が信仰と共に集うようだ。馬事博物館(岩沼市)、馬の博物館(横浜市)なども興味深い。



斗南藩記念観光村・先人記念館



馬の聖地・賀茂神社